

アマダイ通信NO. 116

(Tile fish network letter)

2017年 新光

知人・友人各位

よもやのトランプ大統領誕生であるが、彼を支持したのは「グローバル経済の犠牲者」だということ。だが、トランプ氏の唱える所得減税、法人減税という金持ち優遇税制は白人底辺層ではなく、自身を含めた富裕層への富の偏在を更に進め、所得格差を拡大する。公共投資の拡大で雇用が多少増えたとしても、一番利益を得るのは公共事業の受け皿たる法人とその株主であるから、彼らはトランプではなく、所得の再分配を主張するサンダースを支持すべきだったのではないか？減税と公共投資増で財政赤字を拡大し、所得格差が拡大、国民の間の亀裂が深まる世界一の大国の影響を、日本は否応なく受けざるを得ない。

◎巨星墜つ！

遂にカストロ逝く。巨星墜つ。アメリカの半植民地キューバで、腐敗したバチスタ独裁政権に反対、民族独立と民主主義のために立ち上がった青年弁護士フィデル・カストロを社会主義者に仕立てたのはアメリカ。腐敗したバチスタ独裁政権を擁護、アメリカの權益を確保しようと、カストロの民族民主革命に反対、執拗に反革命干渉、遂には経済封鎖を行い、キューバの経済困難に追い打ちをかけ、ソ連に頼るしかなくし東側に追いやる。

しかし、労働者、農民によるソビエト独裁と計画経済による「一国社会主義」は硬直化した政治経済体制を生み、勤労者の創意工夫を引き出し、生産性を上げることが出来ず、国民生活の向上に失敗。ベルリンの壁の崩壊、ソ連邦の解体、東西冷戦体制の終焉という形で、ソビエト型社会主義はあえなく崩壊した。だがキューバは冷戦体制の終焉、ソ連解体の危機を辛うじて乗り越え、「一国社会主義」体制を維持する。医療、教育が無料、男女平等も徹底、貧しいながらも最低限の生活が保障され、貧しいが故の多世代同居が子育てと介護の問題も解決、治安もいい。それに飽きたらない、少なからぬ人々が150キロしか離れていないフロリダ目指して亡命したのも事実。●も一度キューバツアーに参加。貧しくともホームレスも物乞いもない、陽気に飲み、歌い、踊って人生を楽しむ人々の姿に感銘。電力不足で街は暗いが犯罪が横行する訳でもなく、人々は遅くまで陽気に楽しむ。並べて貧しいが格差のない、しかし最低限の文化的な生活は出来る社会が築かれた。

そんな社会を築いたカストロが死んだ。「一国社会主義」後の「社会主義」の展望もないうまに。隣の大国にカストロとは正反対の、「アメリカ一國主義」を標榜するトランプ大統領が誕生するのと入れ違いに。

◎熊野鍋

小春日和の清々しい朝、東陽町へ。駅を出て右に折れると竹中工務店だが、左に折れ鴻池組へ。途中大きな団地が続く、道を挟んで左に西友。右に地元のスーパーがあり、道の脇に野菜を山積みにしてセール、人を誘う。キャベツ1個138円と安い。夏の天候異変で、野菜が高い。キャベツ半個どころか、4分の1個で128円とか98円する。鴻池組では珍しく素敵な女性の営業部長が、施主の紹介とは言え、丁寧に対応してくれて話が弾む。

帰り、スーパーの前を通るとキャベツの山の隣は大根が山積み。一本 108 円だという。これも安い。つい手が伸びる。よく働いてくれるアシスタントの主婦にも一つずつ、2 セット買う。結構重い。反省するが遅い。アシスタントに聞くと、ロールキャベツか、お好み焼きか？今日はお好み焼きがいいかな！と言いながら持ち帰る。参ったなーと思いながら、ビニール袋に入ったキャベツと大根を、それとわからないようにさらにデパートの紙袋に入れ、顧問先との新宿の鳥料理屋での忘年会へ。

最後に鳥鍋ともつ鍋を頼む。鳥鍋には白菜、もつ鍋にはキャベツが入る。●さん、そのキャベツを鍋に入れましょう！熊野鍋しましょう！と京大 OB の M さん。皆で適当に具材を持ち寄り、薄暗がりの中で鍋を突つき、酒盛りをする。三鷹寮では闇鍋と称していたが、京大では熊野鍋というのか？京大本部キャンパスには吉田寮もあるから、吉田寮では吉田鍋というのか？ビニール袋からキャベツを取り出し、具の少なくなった鍋にむしり取っては入れ、盃を傾け、話が弾む。

運営の全てを寮生に任された自治寮で、闇鍋を突つき、安酒を飲んで、袴を脱ぎ裸の付き合い。人間関係の処理の仕方を学び、濃厚な人間関係をつくった。京大の吉田寮や熊野寮では旧制高校の自治寮以来の伝統が未だに受け継がれているという。体制を支える官僚養成のために創られ、権力そのものの東大と、反（半？）権力の京大の差か？古き良き時代の伝統が失われ、一度廃寮となり、今ではワンルームマンションと化した三鷹寮では、飲酒も禁止だという。無茶を通り越して、社会に異議申し立て、街頭に飛び出し抗議行動、7 回も警察に捕まり、足掛け 3 年未決で拘置所代わりの刑務所に拘留されてもへこたれない猛者もいたというが、今は昔の話だと熊野鍋を突つき、地酒を酌み交わす。翌朝聞けば、アシスタントも昨夜はもつ鍋だったという。

◎ i GEM

師走も近づき、イベントや同窓会が重なり、泳ぐ暇時間が中々取れない。ゴルフもイベントもなく、久しぶり図書館で経済誌を読む。新聞とは違うレベルの情報をインプット。久しぶり 7 百 m 泳ぐ。夕方、その足で事務所に。三鷹の寮友にカンパを募り協力した、アメリカ・ボストンでの iGEM（遺伝子組み換え世界大会）の報告会。顧問先から小型プロジェクトを借り、壁のポスターを外し、酒を買い、おでんを炊き、ピザを頼む。

国内で勝ち残った東大チーム代表の 2 年生・医学部医学科の那須田君と今年入寮で、多才な学生を入学させるための新（学校推薦）入学制度で入学、薬学部への進学が決まっている竹内君、OB が S26 年入寮の平賀代表から 1995 年入寮、ヨーロッパ資本の化学会社ソルベイの、アジア太平洋地区ビジネスデベロップメントマネージャーの横田君まで、全員で 8 名集合。未知の遺伝子組み換え研究にチームで挑み、数世代後に絶滅する遺伝子を組み込んで、地上に存在しない有用生物を創るシステムを提案、並みいる世界の強豪に伍して 2 位に輝く。将来のノーベル賞との賞賛も。高校時代数学オリンピックに出場した竹内君、その時の世界の仲間と再会、名門 MIT（マサチューセッツ工科大学）の寮に寝泊まり、臆することなく世界の未来を創る若き頭脳と交流、ネットワークづくりにも励み、見聞も広がったようだ。そんな若者を応援する機会を持てたのは嬉しい。

この喜びをもっと広め、もっと強力にサポート出来ないか？今回柳澤元金融庁長官から多額の寄付を頂く。富士フィルム古森会長、大久保積水化学相談役、宮原日本郵船元社長・

経団連副会長などの化学・製薬業界、寮OBを中心とした財界人、新入学制度などの大学改革を進めた濱田前東大総長などの学界、政官財学をあげて応援出来ないか？若者は外に出たがらないと爺風を吹かせるより、出たい若者をサポートできないか？

◎サイレントモード

錦秋の土曜日、歌舞伎町のいけす無門で「味は文化です・世界の歓楽街探訪」と称し、豚しゃぶのコース料理を寮生と楽しみボタンキューした翌朝、メール専用ガラケイの紛失に気付く。ゴルフ場で落とした時は無事再会できたと、検索と通話に使っているスマホで鳴らしてみるが、誰も出ない。ランチの开店時間を見計らって店に電話するが、地下鉄の駅で探して貰うが、私学会館での八峰町故郷会の途路、市ヶ谷駅前交番で問い合わせるが、これを機会にガラホに変える。メーカーもパナソニックで変わらず、ガラケイと同じ入力方法のスマホなので助かるが、それでも色々大変。メールはかなり使えるようになるが、秋田出張の朝、地震で新幹線から飛行機に変更するのに乗り換え案内を使えず、苦勞する。スマホの機能もどこまで使えるようになるか？

名刺に刷り込んであるので、電話番号は変えられない。番号をガラホに移動するため、スマホを解約、使わずに一度捨てたiPadを新規に契約（iPhoneとiPadでSIMカードを共有、入れ替え使用）、再びタブレットを持つことになるが、これも使えるようになるか？通信会社の身勝手な「2年縛り」の悪しき契約慣行は止めて欲しい。その内、可能なら格安スマホのSIMカードを買い、iPhoneに入れようかと思う。

翌々週土曜日朝、着替えて出掛けようと、寮生と飲んだ時着て行ったジャケットをクローゼットから取り出すと、コットンパンツの尻ポケットに固い手触り。無くした筈のピンクのガラ携！直ぐ近くにいたのに、何回鳴らしても気がつかなかったのは、サイレントモードにしていたから。一声上げてくれれば、携帯メアドを変え、メールや乗り換え案内を使うのに苦勞することもなかった！（新携帯メアド：amadai-hoshiba@docomo.ne.jp）

の黄土高原植樹紀行Ⅲ・Ⅱ（'16. 8. 26～9. 1）

④大同に青空戻る！

4日目、大同は青空。朝の気温は6度。「西気東輸」のスローガンの下、燃料が石炭からLNGに切り替わり、どんよりと曇り煤けた3、4階建ての、1階がお店の集合住宅が並び、自転車、ラバの荷車、オート3輪が走り回っていた、黒ずんで、すえた匂いの街の印象が、すっかり変わる。5年前より更に大胆に拡幅された道を車が洪水のように流れ、片側3車線、4車線の道だけでなく、側道にも、その外の歩道にも駐車している。こんなにも車が増えるとは。5年前にタワークレーンが林立していた沢山の高層マンションを含めた建物群は完成、すっかり現代的な街並に変わった。新しい建物も続々建設されている。奈良の都、平城京のお手本となった北魏の都、平城京。かつての城内の建物は華嚴寺を除いて全て取り壊し、古の北魏の都の街並みを再現しようという、壮大な試みが進む。5年前には建設半ばだった城郭もほぼ完成している。夕食前、城郭に登ろうと行って見たが、どこが入口か分からず、歩き回った末に引き返して来た。大きな城郭の周りには堀を作って水を引き、その外は広い緑地帯が広がる。ベンチで語り合う若いカップル。ジョギングしたり

犬を散歩させる者も。公園や緑地が増え、マンションやビルが出来れば水が必要だ。かつて水不足で時間給水していた大同。水不足は解消したのか？していないのか？市内の中心を流れる桑干河には新しく何本も橋がかけられ、水を湛えて流れているかのように見えるが、5年前と同じように河を遮って堤を造り、溜まり水を川面のように見せているだけだという。水はどうしているのか？

朝食後、大同県王千戸村の緑の地球環境センターへ。新しい立派な道路が突然工事で閉鎖され、迂回、ヨーロッパまで通じるという大陸横断鉄道の狭い高架下の未舗装の田舎道を少し走りセンター着。ここが現地の拠点。水は井戸水を使う。大同の水の半分は井戸で、半分は近く（と言っても!?) 黄河から引いているという。一人当たり水資源が世界平均の4分の1という中国で、それはいつまで可能か？広いセンターの自給自足の農園で栽培された美味しい西瓜で一息つき、センターの除幕式。日本政府の地球環境基金の資金援助で3年ほど前に建設されたが、折からの日中関係悪化で延び延びになっている除幕式を25周年の機会に行う。日本政府を代表し大使館の西川書記官が、中国側を代表し大同市总工会の副主席が挨拶。この副主席、中々の芸達者で、大同中で知らない者はいないどころか、活躍の場を北京にも広げている。昨夜もホテルの隣の公会堂で彼が総監督を務めたミュージカル？と漫才の公演があり、食後我々も無料招待されたばかり。最後弟さんが演じる漫才に彼も掛け合いで出演、大いに盛り上がった。式後、広いセンター内を全員で見学、記念の植樹。食堂で自給自足の食材でビールつきの美味しいお昼。

昼食後、聚楽郷采涼山地球環境林に向かう。大人の背丈をはるかに越す見事な松林が緩い傾斜地に延々と続く。斜面と等高線状に畝を造り、少ない雨水を逃がさず無駄なく使い、水が蒸散しにくい斜面の北側に苗を植え、苗には菌根菌をつけて、成長を促進するなどの工夫を重ねてここまで来た。続いて、黄土の深い侵食谷の細いクネクネ道をヒヤヒヤしながら、カササギの森へ。日本の法人、個人から一口五万円の寄付を募って出来た広大な森。🍄も寄付、田舎の兄にも寄付してもらった。森の中には古の最新の通信手段だった狼煙台が幾つも見える。谷を越え、野を越え、山越え、ハールバルとという感じだ。采涼山の経験を生かした上で、現地に自生する多様な植生を再現・拡大、草や灌木がまばらに生えるだけだった見渡す限りの黄土の禿げ山が、素敵な緑の森に姿を変えた。所々に真新しい鉄塔。風力発電のために、データを取っているという。かつて新疆を訪れ、ウルムチからトルファンへ陸路で移動中に見た、三蔵法師もインドへの道中通った、一木一草も生えない見渡す限りの石野原、そこに風力発電の無数の大きな風車が回り、圧倒されたが、カササギの緑の森でも巨大な白い風車が自然のエネルギーを生み出すようになるのだろうか？遙か遠い山の稜線で回る巨大風車の群も5年前より、随分数が増えた。

大同市内に戻り、ウォルマートへ。5年前に来た時、広い地下モールに1ヶ所しかないトイレの入口にベニア板を打ち付けてあり、他に探し回ったがトイレはなく、やむなく広い地下駐車場の片隅をトイレとした。5年前と比べ天井のペンキが垂れ下がったり、床材が剥がれたり、メンテナンスの行き届いていないモールの半分を占めるウォルマートに入り、先ずトイレに直行。ビール、白酒付きのツアーなので、ここまで「無銭飲食の旅」だったが、お土産に乾燥した杏の果肉を探すがない。大きな袋入りの木耳と道中食べて美味しかった向日葵の種の、いわばポップ向日葵を買う。今回のツアーで初めてお金を使う。

それぞれ白酒や乾燥果物をお土産に買ったりするが、訪日中国人の爆買いに比べれば微々たるものだ。爆買い中国に多謝！

ホテルに戻り、夕食まで時間があるので、再度お城に挑戦。城内を貫通する道路があり、城内には入れたが、どこから城に登れるのか？ようやく、らしき物を見つけるが、その日は3時までだということで、又も失敗。来た道をそのまま戻るの芸がない。取り壊された部分には黒い煉瓦と瓦で出来た、平屋の綺麗なお店が並んでいるが、街の半分はそのまま残っている。中庭のある干乾し煉瓦の家の間を狭い道がくねり、所々に崩れ落ちそうな公共トイレ。各戸にはトイレはない。小さな床屋や雑貨店、食堂も。古い大同を垣間見る。夕食は羊のしゃぶしゃぶ。野菜もたっぷり。モンゴルツアーのウランバートルでのしゃぶしゃぶ、駒場の中国語クラスの同期会を銀座店で開いたことのある、中国発祥で日本にもチェーン店のある小肥羊を思い出しながら、地ビールと白酒を楽しみ、睡眠導入剤とする。

⑤テーマパーク？雲崗の石窟

5日目は敦煌の石窟と並び称される雲崗の石窟へ。北魏の時代に断崖を穿って沢山の巨大な洞窟がつくられ、それぞれの洞窟に大きな石仏が鎮座、石仏の脇や背面、石窟の壁面にも無数の小さな彫刻が施され、仏教の教えを説く。5年前に比べ「テーマパーク化」が更に進んでいる。立派な入場門や巨大な銅像、寺院、小舟の遊ぶ池に加え、今回は金色の葉が翻る金樹を初め、幾つもの新しい建物が、いかにもその昔からそこにあったの如く、佇立する。目障りな川向こうの煤けた炭鉱街も緑豊かな炭鉱博物館の公園に姿を変えている。こちらもこれまで以上に植栽が進み、北魏の時代から石窟に掘られた仏様の群像が、今や広大な緑の公園の片隅に、変わることなくひっそりとたたずむ。参観料もうなぎ登り。一昨日の縣空寺は125元だったが、こちらは120元(1元15円)。最も60才以上は割引料金。70歳以上は無料。昔は倍くらい内外国人の料金に差があるのが普通だったが、今はどこの観光地も一律だ。彼我の所得格差を問題にするまでもなく、京都の名刹の拝観料に比べてもずっと高い。それでも観光客は引きも切らない。大同に来ると必ず見る石窟、は団を離れ、木陰に腰をおろし、ガラ携のボタンを押し、紀行文づくりに忙しい。石造りの東屋やベンチが、昔からそこにあったかの様に人を待つ。

大同市内に戻り昼食。大同の炭鉱を占拠した日本軍が弱って働けなくなった労働者や抵抗する労働者を殺して投げ込んだ、人骨の上に人骨が重なり、坑道を塞ぐ万人坑を見学予定。いわば中国版アウシュビッツだ。戦争の出来る「普通の国」になることが、侵略・殺戮の繰り返しであってはいけない。リピーターから、大同博物館を見学したいとの声が出て、二手に別れる。博物館組に入り、郊外の新開地へ。広大な敷地の正面、奥まった所に、型通りの厳めしい市役所か共産党委員会？の庁舎が鎮座し、広い通りを挟んだ両側に、奇抜？斬新？な真新しい巨大建築物が並ぶ。図書館や公会堂、体育館等だという。その一つの博物館に入る。さすが、世界四大文明の一つ、黄河文明の発祥地である。恐竜の化石、土器、石器、金銀細工、陶磁器、文物と見るべき物には事欠かない。

口泉植物園で本体と合流する。高速道路の敷地にかかるということで移転を余儀なくされた旧環境林センターをベースに、更に近隣の畑等の敷地も加え広大な植物園が出来、市民の憩いの場ともなっている。中央に、旧環境林センターの中庭にあった垂れ桜が大きく成長、緑の芝の、素敵な緑陰をつくる。皆で緑の大きな傘の中に収まり、往時を懐かしむ。

かつて鉦区の外れの寂しい農地だった所に、多くの市民が寛ぎ、周りには高層マンションが林立。広い道路を沢山の車が行き交う。

大同市総工会主催の歓送会の後大同駅へ。イルミネーションで飾られた駅はいつもの様に人でごった返している。予定では明朝バスで北京を目指す筈だったが、交通渋滞にあうと、北京での午後のイベントに間に合わないかも知れないということで、急遽夜行寝台に変更。5年前はいい加減だった手荷物の X 線検査が、内外情勢の緊迫化の反映か？ 嚴重になっている。ツアーの一行は、いつもは二段ベッドの軟臥（一等寝台）をグループでまとまって取るが、3 段の硬臥（二等寝台）も含め、幾つかに散らばる。幸い三鷹寮の年寄 4 人で軟臥の一室を占める。酒とツマミを出し合い、寝酒の酒盛が始まる。

⑥ 田舎の村長さん

6 日目、前夜 10 時半くらいに大同を発ち、5 時北京着。久しぶりの寝台列車。上下 2 段、3 人の寮の先輩と白酒の水割を寝酒に良く寝込む。北京西駅直前で仲間を起こされ、洗面は勿論、トイレも出来ず、慌ただしく降りる。北京が終点かと思ったのだが、新しい客が乗り込んで来る。5 年前と同じように、「サウナ」へ。大浴場で汗を流し、髭を剃り、髪を調べ、上下の「浴衣」のままで、別のフロアでゆっくりビュッフェの朝食。薄暗い別のフロアでは、リクライニングシートに横になって寝ている者も結構いる。ナインアワーズという機能別・時間貸しの新しいタイプのカプセルホテルの営業も手伝うが、北京でも需要があるのではないだろうか？ 因みにカプセルホテルは日本独特のもので、結構外人旅行者には喜ばれるという。バスで北京の中心部へ向かう。

北京の繁華街王府井に近い、日本で言えば外務省の外郭団体とも言うべき、対外友好協会で、25 年間に 1900 万本の木を植え、6000 ヘクタールの黄土高原を緑の森に変え、貧困な農村の生活向上にも取り組んで来た、緑の地球ネットワーク (GEN) 創始者の高見邦雄君とカウンターパートナーの総工会の幹部を交え緑化のシンポジウム。徒歩で移動、GEN 創始者の高見邦雄君への「中日友好使者」の称号授与式。着なれないスーツの上から大きなタスキをかけた高見君、田舎の村長選挙の候補者のよう。大同のスタッフの他に通訳を派遣するなど、北京で活動を支えて来た仲間、北京在留の大使館や日中経済協会のスタッフなども集まり交流、旧交を温める。北京の外語学院で日本語を教える寮の後輩の津田君も、教え子の男女各 1 名を伴い参加。

終了後、津田君の案内で王府井へ。東京なら銀ブラという感じだが、面白い所があると横道へ。銀座の大通りから、いきなり上野のアメ横に紛れ込んだ感じだ。グロテスクさではアメ横は足元にも及ばない。豚の鼻や耳、手足や鶏の鶏冠、イナゴやバッタの類で驚いてはいけない。サソリやサナギ、トカゲやザザ虫、百足まで串に刺されて焼かれ、芳ばしい香りを流している。中には生きたまま串に刺され、やれ焼くな！ と手や足を擦るサソリや百足もいる。チャイニーズの食欲と好奇心、勇氣には呆れるばかり。食べるどころか、触るほどのジャパニーズもいない。夕食に近くのレストランで中華料理を頂くが、百足やサソリは勿論、豚の頭や豚足を注文する者すらいない。

最終日、古宮（紫禁城）も見学するが、宝物まで見る時間はなく、ドンガラ巨大木造構築物はこれまで何回も見ているので、綺麗になったトイレの前の長椅子が空いたのを幸い座り込んで、ガラ携片手に忙しく、紀行文を後追いで打つ。空港で出発を待つ間、昼食

がてらビールの飲めるレストランを探す。ファーストフード系の店ばかりで混んでいる。空いているそれらしい中華料理屋に入るが、落ち着いて注文する段になって、お酒は置いてないという。前夜のレストランで飲みきれなかった白酒を分け合って飲み、旅は終わる。

◎「福島原発と原子力のこれから」

・・・東大三鷹クラブ第130回定例懇談会のご案内

小佐古さんは昭和43年入寮、広島・修道高校出身、一人で上京、三鷹寮の下見に来た時、春休みで人気のない玄関に襦袢を着て、やたらと声の通る“おっさん”が出てきて、「そりゃ〜、絶対に三鷹寮のほうがいい」と強く推すもんだから、三鷹寮に入ることになったそうです。まさに、干場革治さんでした。戦前からのおんぼろ建物の東寮に配されガックリ、寝室は落書き一杯の巨大な2段ベッド、相棒は42年入寮の吉田健さん。卒業後も何度かお邪魔し、あの高笑いに元気をもらっていたのですが、何年か前から弁護士事務所をたたみ、下町で困っている人のために戦うんだなどと言われ、「年を取り定年後、人生どう生きるべきなのかな」などと考えていた矢先のこと、今年の初夏に亡くなられショックを受けたそうです。

駒場ではバリケードの中で議論や先生方との対話（つるし上げ？）をやったりした経験から、東大の先生になった後には、反面教師（?!）として、なるべくきちんと学生のほうを向いてやっていくよう心掛けてたそうです。

原子力工学科に進学、修士、博士と経る過程で、東京大学研究用原子炉「やよい」が臨界化、高速中性子炉として利用、更に欧米最先端とも直結する日本原子力研究所の利用ともども、抜群の研究環境で、睡眠時間を除く24時間存分に研究に没頭。卒後は、朝永さん、小柴さん、益川さんというノーベル賞学者を輩出した東大・原子核研究所で助手5年、その間の「核研・放射能汚染事故」に際し中心メンバーとして事故の対応・収束活動を体験し、「原子核・放射線の安全は片手間でやってはいけない」と実感、安全研究を自身の研究分野としました。

その後も原子力一筋、東大助教授（原子力研究総合センター）、東大教授（学系・原子力専攻）となり、広島・長崎の原爆影響、被爆者の分析、原子力船むつの放射線遮蔽研究、国際放射線防護委員会委員、(社)日本保健物理学会会長、放射線審議会・基本部会長、アジア・オセアニア放射線防護学会会長等々の重要な仕事をこなし、経済産業大臣賞、文科大臣賞、環境庁賞、米国保健物理学会賞など原子力の第一人者として輝かしい業績をあげ、昨年東大退官、現在東大名誉教授に任じられる。

小佐古さんの真骨頂は、福島原発事故に際し、内閣官房参与に任じられ事故対応に当るが、政府対応の酷さに抗議、“学問上の見地のみならず・・・私のヒューマニズムからしても受け入れがたい”と述べた参与辞任に象徴される権力に阿らない誠実な人間性にあると思います。この経緯について当時の官邸の実情、学界、官界、マスコミ等の対応を含め興味津々のお話があります。放射能、原子力、原発、その安全研究では世界の超第一人者である、彼の誠実な存在は、日本の宝であり、同期入寮者の誇りであり、今回直接彼の話の聞けることは幸せです。（昭和43年入寮 勝部 日出男記）

福島原発の廃炉処理、日本と世界の原子力政策の在り様・趨勢などについても、お話して頂けると期待しています。（昭和41年入寮 襦袢のおっさん）

日時：平成29年2月1日（木）18時30分～21時（開場18時、会食18時30分～）

場所：学士会館本館203号室（千代田区神田錦町3-28 TEL 03-3292-5931）

会費：6000円（会場費、夕食代・飲み物代、通信費など込み）、読者の参加歓迎！

申込先：平賀・干場 FAX 03-5689-8192 TEL 03-5689-8182

（有）ティエフネットワーク Email：tfn-hoshiaba@blue.ocn.ne.jp

二次会：別途 近くの中国料理店 SANKOUEN で、講師参加で行います。

◎「味は文化です」冬季編

11月19日（土）6時半から歌舞伎町のいけす無門で、寮生と豚しゃぶのコース料理を楽しむ。併せて、インバウンドに人気の世界の歓楽街、歌舞伎町の探索も楽しんで貰う。その分、頑張っ稼がなくてはいけないが、交流出来ているのは寮生とコミュニケーションが取れているということで嬉しい。ワンルームマンションと化したかつての自治の学校、三鷹寮で、全国、全世界から集まる若き俊秀達が、多少とも交流を深め、人間関係の処理法を学び、ネットワークを広げ、いずれ日本と世界のために活躍してくれるなら、何物にも優る喜びだ。老骨に鞭打つ励みにもなる！？

参加者は、吉岡 純矢（2014（院）・総合文化研究科・札幌南）、赤間 建哉（2015（院）・法学政治学研究科綜合法政・宮城・仙台第一）、張 喩（2015・建築修士1年武漢大学）、シズミ コウ（2015・理Ⅱ・上海・進才中学）、竹内 博俊（2015・理Ⅰ・愛知・時習館）、登坂 亮哉（2015・文Ⅱ・灘）、パク ビョンジュン（2015・文Ⅲ・韓国・東）、平松 彩人（2015・理Ⅰ・愛知・一宮）、横字 史年（2015・文Ⅲ・岡崎）、KO HIU TUNG（2016・文学部日本語日本文学国語学・香港中文大学）、CHAN YAN YEE（2016・文学部美学芸術学・香港中文大学）、北里 知也（2016（院）・情報理工学系研究科電子情報学・埼玉・開成）、萩原 達也（2016・教育学研究科学校教育高度化・栃木・矢板東）、青山 絵里香（2016・文Ⅲ・愛知・一宮）、岩坪 未矩（2016・文Ⅲ・鹿児島・ラサール）、小林 義信（2016・理Ⅱ・茨城・水戸第一）、竹内 碧（2016・理Ⅱ（薬学部）・高知学芸）、田中 雅史（2016・文Ⅲ・熊本）、橋本 豪（2016・理Ⅱ・東邦大附属東邦）、檜枝 悠太（2016・理Ⅰ・東大寺学園）、與古田 紗椰（2016・文Ⅰ・沖縄・球陽）、四元 秀斗（2016・理Ⅰ・鹿児島・ラサール）、Alexander Lin（2016・国際本部 USTEP・プリンストン大学 比較文学部3年）、王 澤辰（2016・国際本部 USTEP・大連メープルリーフ国際学校）、磯上 樹、國枝 明弘【春風亭昇吉】（2003・文Ⅱ 経済・岡山・城東）、辰 紘（1965・文Ⅰ・大阪・三国丘）、干場 革治（1966・文Ⅰ・秋田・能代）。

★お世話になっております。横字です。先日の歌舞伎町での食事会、誠にありがとうございました。おかげで交遊の輪をひろげることができました。干場さんのお蔭です。今後とも、どうぞよろしく願いいたします。あらためて、いつもご支援いただき誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。

◎終わりに

「住む人と話をする機会があまりない」寮にしてしまった責任の一端を感じ、日本と世界の未来のため！？貧者の一灯を先行投資。長者の万灯の足下にも及ばないが、若き俊秀達に喜んで貰えるなら、貧者の二灯目、三灯目も頑張りたい！再見！